



## スピーチ集を読めば、 「一帯一路」がわかる

### —中国の外交や政治を知るための2冊—

日本の著名ジャーナリストで、元朝日新聞中国総局長の藤原秀人氏は、最近、日本の知識人向け雑誌に二回連続で、日本僑報社刊行の『中国古典を引用した習近平主席珠玉のスピーチ集』および『中国集団指導体制の「核心」と「七つのメカニズム」』を取り上げ、書評で紹介した。いずれも日本人読者に強く勧める内容である。

日中関係が大変厳しい中で、なぜ一人のジャーナリストが習近平氏に関する本を読者に勧めたのか。藤原氏は、「習近平氏のスピーチ集を読めば、氏の重要な思想、特に提唱している『人類運命共同体』と『一帯一路』がよく理解できる」と語る。今号では、藤原氏にこの二冊を詳しくご紹介いただいた。



西池袋の中華料理店にて、歓談に興じる藤原秀人氏（右）と段躍中日本僑報社代表



## 中国古典を引用した 習近平主席珠玉のスピーチ集

本書編集委員会 編 日中翻訳学院 訳  
A5判 360頁 並製本  
ISBN 978-4-86185-291-6 定価 3600円＋税

中国取材で難儀するのは、指導者が演説に古典を多用することだ。中国共産党は旧弊を打ち破り新しく中華人民共和国を建国した。しかし、最高指導者の毛沢東は古典の愛読を止めなかった。後に続く指導者も古典の引用を好む。外国人は当然、解釈に苦勞する。

現在の習近平国家主席も古典をしばしば引用する。『中国古典を引用した習近平主席珠玉のスピーチ集』（日本僑報社2020）は、「中国の特色ある社会主義思想に対する理解を深め、中国古典を学び、中華文化を発揚するため」テレビが放送した番組を採録したものだ。

スピーチ集は12章からなり、党や国家の指針について古典を引用し述べている。「習近平外交思想」のキーワード「一帯一路」と「人類運命共同体」もあげられている。

「一帯一路」とは、絹の交易路だった陸と海のシルクロードを再現し、参加国との間で貿易や投資を増やし、共に経済を発展させようという呼びかけだ。習氏が2013年に提唱した、2016年にカイロのアラブ連盟本部で述べたものが、以下の通りである。

中国古代の聖賢である孟子は「天下を以って己が任となし、天下を導く指針となる」と述べました。一帯一路という友人の輪を広げましょう。「真空」を埋めるのではなく、互惠とウィンウィンを目指す協力パートナーのネットワークを形成するのです。

「人類運命共同体」については、習氏の2018年のマルクス生誕200周年記念大会での次の発言を収めている。

「世の万物は共に生育して、互いに邪魔をすることはなく、様々な道が共に行われて、互いに食い違ふことはない」。(儒家の經典『礼記・中庸』)

平和的発展の道と独立自主の平和外交政策、互惠とウィンウィンの開放戦略を維持し、世界各国との協力を絶えず拡大し、グローバル・ガバナンスに積極的に参画し、より多くの分野、より高いレベルで、協力とウィンウィン、共同发展を実現し、他人に依存せず、他人から奪わず、各国の人々と手を携えて人類運命共同体を構築し、より良い世界を実現しましょう。

## ■聞き手 段景子より

このたび、元朝日新聞中国総局長・藤原秀人様へ本書をご紹介いただき、心より御礼申し上げます。

本書は中国中央テレビCCTVの特別番組を書籍化した『中国古典を引用した習近平主席珠玉のスピーチ集』の邦訳版です。vBook（ビジュアルブック）として刊行され、QRコードから習近平国家主席のスピーチ（生声）やテレビ番組の動画を視聴することもできます。習近平新時代の中国の特色ある社会主義思想に対する理解を深め、中国古典の名言や中華文化を学ぶ上でも役立つ一冊です。

私が担当している早稲田大学の「中国語作文（上級）——エッセイを書く」という講義では、本書をはじめとする中国の優れた書籍を教材として用いました。学生たちは、習近平国家主席のスピーチを通じて、修身・家風・齐家・治国平天下といった中国伝統文化に根差した思想を知るとともに、社会主義核心価値観を学ぶことができ、中国の政治経済の理解のみならず、数々の古典を踏まえた悠久の中国文化への理解を深めるうえで、大いに役立つ教科書ともなりました。

学生たちは熱意をもって授業に臨み、活発に質問や議論を交わし、課題にも積極的に取り組んでくれました。その感想をご紹介します。

### H.T.さん

習近平国家主席のスピーチを読み、第一に発音が意識された構成の美しさが印象に残りました。中国語の中でも最も発音が美しいとされる北京語によって、このような美しい内容と発音の文章が読まれることにはロマンを感じます。

内容については、数多の人口を抱える中国の国家主席として、教養や倫理規範を国全体に浸透させる狙いがあるのではないかと考えました。ですので、先生がこの本は中国人の考え方の基礎を理解する上で有効であると仰っていたことにも納得しました。

### C.H.さん

家風とはややズレますが、「積善の家には必ず余慶があり、積不善の家には必ず余殃あり」という言葉を聞いて印象的だったのは、徳を積むという行為が“家族単位”で換算されているという新たな視点でした。

私はこれまで、徳を積むことは基本的に“個人単位”で考えてきました。しかし、この言葉は、子孫に受け継

がれていくものは血や遺伝子、財産、教育、理念といったものに限らず、「徳」という漠然とした概念も含んでいた可能性があることを示唆しているのではないかと感じました。

#### F.A.さん

習近平主席は演説の際、しばしば「諸子百家」の古典を引用することが特徴的である。これらの古典に込められた深い思想は、すべての中国人にとって幼少期から自然に触れ、耳にするものであり、単なる歴史的遺産にとどまらず、文化の根幹を成す重要な要素となっている。これらの教えは中国人の人生観や価値観に深く影響を与え続けていると言える。

私は、「人に色を褒めさせることなく、ただ清気を天地に満たす」という考え方は、内面的な修養を求めるだけでなく、人生における詩的美徳を具現化するものだと考える。この美徳は、表面的な華やかさを追求するのではなく、淡泊でありながらも清新な境地を目指すものであり、まさに中国伝統文化における最も貴重な部分であると評価できる。

#### K.K.さん

習近平主席の言葉の中で、特に興味を待ったのは「修身」の考え方でした。高校時代から強く共感する「修身齐家治国平天下」という言葉にもある修身が紹介されていて嬉しかったです。古代から伝わる、良い循環が、連鎖的に広がるといった考え方が特に好きです。

また、習近平主席の言葉や思想が一般中国人の間でどの程度浸透しているのかにも興味があります。これはエリート層の理想観として語られているのか、それとも人々の価値観として根付いているものなのかを知りたいです。

#### S.W.さん

私は家風を重視することは教育と生活の面において確かに重要だと思います。「善を積む家と積まない家」の一文は、家風を重視することの良さと家風を重視しないことがをもたらすかもしれない悪い結果をととても簡潔に表しています。

「修身とは何か」の章では党員幹部が中国文化から栄養を吸収することと人民に学ぶことは修身の重要な道筋だとしています。私はこれはとても理にかなっていると思います。党員として特に幹部階層は一種の自分

国を代表しているという祖国意識を持つことが必要である。なので中華文化に対する知識と理解を怠ってはいけません。党の標語は「人民に奉仕する」で、党員は一般民衆を中心に社会問題に向き合わなければいけません。なので人民に学ぶことはとても重要なことなのです。



段金子先生と学生たちによる、早稲田大学の授業の一風景



#### 中国集団指導体制の「核心」と「七つのメカニズム」

胡鞍鋼、楊竺松 著 安武真弓 訳  
四六版 176 頁 上製本

ISBN 978-4-86185-245-9 定価 1900 円 + 税

『中国集団指導体制の「核心」と「七つのメカニズム」』（日本僑報社 2017）は、長年中国政府の政策を内外に向けて広報してきた清華大学の胡鞍鋼教授と助手の楊竺松氏による。2013年に中国で出版され、ドイツと韓国でも翻訳出版された。「中国の要は中国共産党にあり、中国共産党の要は中央政治局常務委員会にある。中央政治局常務委員会の要は指導制、すなわち党中央の集団指導体制にある」という毛氏の次世代の最高実力者だった鄧小平の言葉を借りたうえで「ここに中国が成功を重ねている鍵がある」という。

中国共産党は様々な困難を克服するために鄧らが中心となって集団指導体制の再構築に励んだ。その結果、国家主席や首相、議会にあたる全国人民代表大会の常務委員長、統一戦線組織である人民政治協商会議の主席といった国家の主要機関の要職を最高指導部の党政治局常務



委員が分担することが徹底された。胡氏らによると、集団での「引継ぎ」「分担協力」「学習」「調査研究」「政策決定」という五つのメカニズムが整い、さらに習氏の時代になり「外交」と腐敗防止のための「自律」が加わり、これら七つのメカニズムが集団指導体制をさらに充実させているという。その体制を束ねるのが「核心」である習氏である。



藤原 秀人（ふじわら ひでひと）

東京大学教養学部教養学科卒業後、朝日新聞社入社。中国担当が長く、香港特派員、北京特派員、中国総局長（北京）などを歴任。中国担当論説委員や編集委員を務めたほか、2000年から1年間、米ハーバード大学国際問題研究所客員研究員。2012年から2014年まで新潟総局長。2019年退社後は、フリーのジャーナリストとして活動。



中友会会員による  
中国滞在体験談

## 私の中国物語

「私の中国物語」その①

### 人生は中国とのつながりと共に

公務員 西村 文彦



送っていただいたマスク

が「川」だということが俄かに信じられなかった。今思えば、これが中国の雄大さに直に触れた初めての経験だったと言える。更に、それぞれの地域を鉄道で訪れた時に、駅で小さな子どもたちが声高に「熱烈歓迎」をしてくれたこともよく覚えている。これが、私と中国との付き合いの始まりである。

次に中国を訪れたのは、大学3回生の時、吉林省長春市の東北師範大学への約3週間の語学短期留学である。真夏というのに冷涼な気候が心地よかったことやホームステイで餃子を御馳走になりながら、餃子包みはお父さんの重要な役割だと教えられたことを懐かしく思い出す。また、一人、昭和初期から走っていたという古い路面電車に揺られながら町を散策した時、この地がかつて、両国の歴史において非常に重大な地であったことに思いを馳せたことが、思い出される。

私は今年（※執筆当時2022年）で49歳となるが、自身と中国のつながりを考えると本当に長い付き合いになったと感じる。初めて中国を訪れたのは、1987年で中学2年生14歳であった。当時、兵庫県が主催していた「兵庫県民の船」という行事に伯父が連れて行ってくれ、約1週間、上海、蘇州、無錫、杭州を訪問するという旅であった。当時船で玄界灘を通り国境を越え、長江に入った時の、その大きさに驚いたことは、今でもよく覚えている。ちょうど瀬戸内海を通る航路だったので、これ

その後も、北京や上海を数日間旅行したことはあったが、2008年に仕事で湖南省に経済交流駐在員として2年間派遣されたことは、私の人生にとって大きな転機となった。大学卒業後、民間企業に約3年ほど勤めた後、滋賀県庁に転職したのだが、まさか中国で生活する機会が来るとは思わなかった。滋賀県と湖南省は、琵琶湖と洞庭湖という湖が取り持つ縁で、1983年に友好提携を結んだ。その後、文化や経済、環境など様々な分野において交流が行われ、深化してきたのだが、その中でも、人

的交流は、両県省のつながりを更に強くすることにおいて大きく貢献してきた。具体的には、湖南省からは技術研修生として毎年数人を受け入れ、滋賀県からは職員を派遣するという人と人との交流である。なお、技術研修生は約200名に上っている。

県庁に入ってから中国語の勉強を続けていたことを知っていた上司から応募を勧められ、当初、語学などの面で戸惑いもあったのだが、せっかくの機会であるし、中国はとても関心のある国であったので、応募することにした。

初めての海外での長期生活、それも湖南省長沙市という中国の地方都市での生活は、やはり不安があったが、幸い、辛い物が大好きで、お酒も少々嗜むことができた私は、辛いことで有名な湘菜や非常に度数の高い白酒「酒鬼」の生産地として有名な湖南省では、当初から多くの方から歓迎していただくことができた。しかし、駐在員というのは、滋賀県の経済発展などに向け、湖南省における開発区の情報の提供や、環境や観光など様々な分野でのつながりを開拓、醸成していくという大変重要な仕事があり、この大きなミッションを果たしていくためには、第二外国語程度の語学力では到底太刀打ちできず、また能力、経験も全く不十分であり、さらには言葉が通じず、日常生活もままならない状況で、湖南省への着任当初は引きこもりがちにならざるを得なかった。

このような不安を徐々に解消して、駐在員の業務を遂行できたのは、先に述べた技術研修生として以前滋賀県で研修をしていたお二人の方の大きなサポートがあったことが欠かせない。お一人は、省政府に勤務されている

方で、もう一人は、現地で会社経営をされている方であった。お二人とも、豊富な人脈を駆使して、私の公私に亘る活動を支えてくださり、おかげで2年間に亘る駐在員としての業務を何とか全うすることができた。まさに両県省の人のつながりに助けられたのである。

そして、2年前に忘れられない出来事が起きた。当時私は、滋賀県の東京の事務所に勤務していたのだが、まさに新型コロナウイルスによる緊急事態宣言の真ただ中で、マスクの調達もままならなかった。このような中、上述のお一人の方が、マスクを送ってくださったのだ。私はとっさに、駐在員の期間が終わり長沙を離れる時に「あなたのような永遠の友と出会えたことに感謝している」という内容のメッセージを中国語で送ってくれたことを思い出した。

そして、今年の4月から、再び中国湖南省との交流の仕事を担当することとなった。これからまた両県省の新たなつながりづくりに向けて仕事ができることに本当に感謝している。

中国とのつながりは私の人生を本当に豊かにしてくれている。これも、両国のつながりづくりに向けた先人たちのご尽力のおかげであり、日中国交正常化50周年を迎え、改めて心から感謝の意を表したい。

#### 西村 文彦（にしむら ふみひこ）

滋賀県総合企画部国際課勤務。1973年兵庫県神戸市生まれ。同志社大学経済学部卒業後、株式会社高島屋を経て、2002年に滋賀県に入庁。中学2年生の時初めて中国を訪問。大学3年生の時に吉林省長春市で語学短期留学。2008年から2010年まで滋賀県庁から友好都市である湖南省に経済交流駐在員として派遣。現在、県庁において滋賀県と湖南省の交流を担当している。

#### 「私の中国物語」その②

## 温かくて優しい教え

俳優 加山 到

1972年（昭和47年）6月。外務省職員だった父は、数か月後の日中国交回復の兆しがある中で本省よりその命を受け、家族と共に北京に移り住みました。当時私は小学3年生。北京語など全くわかりません。もちろん日本人学校はまだなく、夏休みの時期を終えた頃に、中国人児童が通う現地小学校に編入する事になりました。

その学校は我が家が住む外交公寓（外国人用アパート）からほど近い場所にありました。二階建てのセメン

ト塗りの質素ともいえる校舎。風が吹けば土煙が舞うでこぼこしたただの更地である校庭。日本には必ずある鉄棒や雲梯などの遊具、プールや体育館など施設はありません。校名が書かれた看板がなければ、何に使われているかわからないような建物でした。

学校側から指定された8月末のある日。私は両親と、一緒に編入する浜口兄弟一家と共に学校を訪れました。校門を入ると、左右に分かれて立ち並んでいた数十名の



生徒たちが、カラフルな紙で作った花を振りかざしながら、「歓迎 (huan ying)！ 歓迎！」と迎えてくれました。驚きと恥ずかしさを感じながら校舎の玄関に向かうと、校長以下数名の教師が待っていました。同行していた父の職場の通訳を介して簡単に挨拶を済ませたあと、案内されるままにとある教室前まで来ると、先ほどと同じように花を持った女子生徒たちが「歓迎！ 歓迎！」と笑顔。教室の中には更に別の生徒たちが、ここでもまた大きな拍手で私たちを迎え入れてくれました。まるでレッドカーペットを歩くアカデミー俳優のようですが、その時は自分に何が起きてるのか理解できず、ただただ「歓迎！ 歓迎！」の声と多くの拍手に圧倒されていました。

教室の正面に貼られた毛沢東主席の肖像画の下にある黒板には、赤や白のチョークで「熱烈歓迎日本小朋友」と大きく書かれており、用意された椅子に私たちは座られました。間もなく校長先生の挨拶が始まり、促されて父親達も必死に勉強したであろう北京語で挨拶。そして私は覚えたてのハーモニカで「春の小川」を吹き、浜口兄弟は「手のひらを太陽に」を歌いました。その後は中国人生徒による歌や踊り、武術の演武まで披露してくれました。一足先に入學していた先輩格の日本人女子・稲田さんも歌を披露。数日後に国交回復する友好ムードの中で行われた、文字通り熱烈な編入式でした。

翌日から通学が始まります。朝、外交公寓の門前には私たちそれぞれの同学（級友）がなんと！ 迎えに来てくれていました。学校側の計らいだったのでしょうか。私には張山くんという同学が、その日以降雨の日も雪の日も毎日欠かさず迎えに来てくれ、下校時も必ず送り届けてくれました。進級してもクラス替えがなかったのも、張くんは卒業するまで毎日私を見守ってくれたのです。

授業はもちろん北京語です。全くわかりません。でも、新しい漢字を学んだり短い文章を覚えるために皆で声を出す時には、教師や学生が手振りで「声を出して」と教えてくれます。音楽の授業でもとにかく皆と一緒に歌いました（革命の歌ばかりでしたが）。時には手の空いてる教師が私を別室に連れて行き、絵札などを使って北京語を教えてくれました。休み時間になると同学たちはノートを指しては「本子 (ben zi)」、教科書を持ては「課本 (ke ben)」。少し慣れて来ると今度は私が「のおと」「きょうかしょ」と日本語読みを教えたり……。誰もが常に笑顔で接してくれ、私は嫌な思いひとつすることなく、学校生活に溶け込んでいきました。

日本では漢字の勉強を始めたばかりの年頃の私にとっ

て、漢字ばかりの教科書は当然読めませんでしたが、その中に何度も出て来る「日本」の二文字に、私は赤ペンで線を引いていきました。純粋に嬉しかったのだと思います。ただ、「日本」の後には必ず「鬼子」「帝国主義」の文字が付いていました。

ある日、そんな私の教科書を見た担任教師がこう話し始めました。

「皆さん、教科書を置いて下さい。……かつて我が国と日本は戦争をしていました。良くない時代がありました。でも今は、私たちの国は仲良くなりました。そしてこのクラスには日本人同学もいます。皆と一緒に勉強をして、一緒に遊んでいます。これから両国はもっともっと仲良くなっていくでしょう。」

この日の出来事は、親と教師との間でやり取りされていた連絡ノートに書かれており、教師が言った内容を私は親から聞きました。小学校低学年には戦争がどのようなものかまだわかりませんでしたが、教師の言葉は、目の前に座っている生徒たちが、今後両国の懸け橋になるのを望んだ上での教えだったのでしょうか。どんなに温かくて優しかったか。50年を経た今でも、思い出すと胸が熱くなります。

#### 加山 到 (かやま いたる)

1963年横浜市生まれ。父親の仕事により少年期を北京・上海で過ごし現地に通う。国際基督教大学高等学校、桜美林大学文学部中国語中国文学科を経て全日本空輸に入社。羽田及び成田で旅客業務や中国出張に従事。1988年俳優活動開始。ドラマ「大地の子」「さよなら李香蘭」「流転の王妃」「ホーム&アウェイ」「レッドクロス」「Game Of Spy」映画「落陽」「SPRC ～結～」朝ドラ・大河・月9他多数。



編入式での加山さん。歌や踊りを披露してくださり、黒板にある文字通り熱烈歓迎でした

「私の中国物語」その③

# 人と人の間に国境は無い

大学院生 大橋 遼太郎



中国の仲間たちと共に（左から2人目が大橋さん）

「日本と中国は戦争をしていたのに、日本人の自分を育ててくれた中国人がいたんだよ。人と人の間に国境は無いんだよ」。私が物心ついた頃から、口癖のように祖父は言っている。たどたどしい日本語で……。

82歳の祖父は、満蒙開拓移民として中国の東北に渡った曾祖父母の元に生まれ、5歳の時、中国残留孤児となった。その祖父を引き取り、大事に育ててくれた中国人の養父がいたのだという。

私が、祖父のこの境遇と口癖の意味を理解できるようになったのは、ある出来事がきっかけだった。

小学生の時、母の中国留学に伴い、私も北京で3年間暮らすことになった。北京の現地校へ通っていた私は、初めのうちは中国語に苦しんだが、多くの先生に支えられ、すぐに仲良しの友人ができ、充実した日々を過ごしていた。

中国での滞在生活が1年を過ぎた頃のある日の国語の授業のことだった。授業が始まり、教科書のページをめくると、「小英雄」というタイトルと共に、奇妙な挿絵が目飛び込んできた。赤いチョッキを着た少年が、右手に槍を持ち、大きな岩の上に立っている。そして、その岩の少し下の方には、緑の帽子と服を身につけた兵隊らしき大人が5人。みな少年の方に槍を向けている。少年に一番近い人の槍の先には、白い旗のような物がぶら

下がっている。その旗の真ん中に、赤い丸が岩に隠れて半分だけ見えている。挿絵が何を表そうとしているのか、この時の私にはまだわからなかった。国語の賈先生はいつものように、しっかり聞くように、と指示を出してから、ゆっくりと朗読を始めた。

「9月16日の朝、山に沿って攻めていた日本軍が、村に迫っていました。13歳の少年が村への案内を頼まれましたが、危険を察し、軍を袋小路へと誘導しました……」。いつもは優しい賈先生の朗読の声が、暗くくぐもった。「……少年は殺されました。寒い山の中、村人を守った少年の血は滴り、青い空を紅に染めました……」

教室の中はいつもより静まり返っていた。

私は、頭を鈍器で殴られたような衝撃を受けた。そして、中国に来てから理解できなかった奇妙な断片的なシーンが、スライドショーのように、次から次へと頭の中を駆け巡った。

「手心手背（手の平・手の甲）、狼心狗肺（狼の心・犬の肺）！ 日本投降、中国万歳！」のチーム分け（日本でいう「グー」と「パー」によるチーム分け）の掛け声は、単なる語呂合わせではなかったのか。テレビで偶然見た抗日ドラマは、フィクションではなかったということなのか……。

点と点が繋がって線となっていくように、今まで理解できなかった数々のシーンが繋がって、一本の大きな矢となって私の心に深く突き刺さる。急に怖くなった。日本人である自分が、責められているような気がした。

## ■第1回中友会出版文化賞受賞作

大橋遼太郎著『七歳の僕の留学体験記』



ある日突然中国の小学校に留学することになった7歳の日本人少年の奮闘と、現地の生徒たちとの交流を書いた留学体験記。

四六判 164 頁 並製本  
ISBN 978-4-86185-331-9  
定価 1600 円＋税



「戦争の話なんて嫌だ。早く終わってくれ！」

早くその場から逃げ出したかった。教室を飛び出して、誰もいない所へ行きたかった。

「早く終わってくれ！ 早く終わってくれ！」

必死に祈った。中国に来てから、40分間の授業がこんなに長く感じたことは、初めてだった。

ようやく授業の終わりのチャイムが鳴った。しかし、私は動けなかった。あんなに教室から逃げ出したかったのに、動けなかった。

「もう誰も、一緒に遊んでくれないかもしれない……」

しばらくして、「卓球やりに行こう！」という、仲良しの李君の声が聞こえた。おそろおそろ顔を上げると、そこには、いつもと変わらない笑顔があった。その横には、付君もいた。ふたりの後ろには、馬ちゃんや王ちゃんや、他にも大勢のクラスメイトがいた。

「人と人の間に国境は無い」

この時、ふと祖父の口癖が浮かんできた。そして、戦争について何も知らなかった自分が恥ずかしくなり、腹が立った。

私は、私が生まれる前にあった戦争が憎い。中国の仲間たちとの仲を邪魔しようとする戦争が憎い。中国の多くの人々の命を奪った戦争が憎い。祖父を酷い目に合わせた戦争が憎い。憎くて、憎くて仕方がない。でも、そ

の憎い戦争を無かったことにすることもできない。「じゃあ、どうすればいい？」「じゃあ、私は何をすべきなのか？」と、この出来事以来ずっと考え、もがいている自分がいる。

中国の親友たちとは、今も電話やメールで頻繁にやり取りをしている。李君は大学に合格してから、日本に遊びに来てくれた。これからも、私に大切なことを教えてくれた友との絆を大事にしていきたい。

今、私の通う大学のキャンパスには、多くの留学生がいる。私は、自分が中国に留学していた時にしてもらったように、積極的に彼らの生活や学習のサポートをしている。彼らを通して、中国に関わった先生や級友に恩返しできたと思う。

いつしか、「日本と中国」が私の人生のテーマとなっている。自分の一生をかけて、日中両国の平和に貢献したい。そして、次の世代に、自分の体験と共に祖父の口癖を伝えていきたい。

大橋 遼太郎 (おおはしりょうたろう)

1999年、長野県生まれ。2007～2010年、中国・北京に滞在し、現地の小学校で学ぶ。中国での滞在を機に、中国残留孤児であった祖父の境遇や自らのルーツを知る。これまで、主に中国滞在中の出来事を「毎日小学生新聞」に連載し、日中両国の相互理解に努めてきた。現在は、同じキャンパスに通う留学生との交流会の企画や、生活・学習のサポートに尽力している。

2022年、第5回「忘れられない中国滞在エピソード」で二等賞受賞（当時東京理科大学工学部機械工学科4年生）。2023年3月に『七歳の僕の留学体験記』（日本僑報社）刊行、第1回中友会出版文化賞を受賞。

#### 「私の中国物語」その④

## 中国人のDNAも!?

主婦 高野 尚代

「中国へ行ったら、外では中国の悪口は言わないようにね」。

2011年5月、夫の北京赴任に伴い、出発する1か月前、送別会を開いてくれた友人の言葉が印象に残っている。

体制の違う国に行く事に不安が募る一方、どんな国なのか興味が湧いてきた。下準備が乏しかった事が逆に良かったのか、いざ北京に行くと、中国の懐の広さに私はスッポリと包まれ、どこか懐かしいような、自分の中に中国人のDNAも組み込まれているかのような居心地の良さを感じた。

中国を思い返す時、私にとってのキーワードは3つ、「時」と「人」、それに「食」だ。

〴〵時の流れのスピードが日本と違う！、

日本では一歩外に出ると至る所（公共の場、交通機関、店舗等）で時計を目にするが、中国に居た時、外出先のどこかで時計を見かける事が本当に少なく、地元の時計店でさえ展示されている時計の針がバラバラ。バス停の時刻表には、〴〵5分毎、〴〵15分毎、としか書かれていないので、日本のようにオンタイムにバスが来る事はない。

中国人は時間に大らか。時間に振り回されていた日本の生活と違い、何だか余白のある大きな枠の中で動いている感覚だ。悠久の歴史を持つ中国にとって〴〵今、は、小さな点に過ぎないのであろうか。かと言って、3年余りの中国滞在中に一度も約束の時間を破られた事はなか



った。どの国においても人間性、誠実さ、温かさは個人の問題であり、国という単位で人々を一括するには出来ないと実感した。良い関係は中国人対日本人ではなく、人対人で築くものだ。

国土の広さや資源の豊かさ、数千年と紡がれた歴史が人々の心や文化を育む。中国の広大さは、日本との大きな違いの一つだ。

「広さ、は、何をするにも時間がかかる。あるショッピングモールでトイレを探した際、表示（日本よりアバウト）通りに移動しているはずが、広くてなかなか辿り着けず、大変な思いをした。それを教訓に、トイレは行きたい時ではなく、見つけた時に行く事に徹した。

また、家族で寧夏回族自治区の銀川に旅行した時には、羊の皮に空気を入れて膨らませた浮き袋（羊そのままの形状）を使った筏に乗り黄河を下った。これは観光の一つになっているもので15～20頭位の羊の皮の浮き袋の上に筏の骨組みが組まれていて、その上に乗って川面を進む。船頭の若いお兄さんは、片手に持った菓子パンをかじりながら大河に揺られ、のんびり船先に座っている。簡素な筏に不安もあったが、かつて移動手段として地元で実際に使われていたと聞いて、太古に思いを馳せた。「時の価値、と「広さ、は、ある意味比例していると感じた。「小さな事は気にしなくて良い」と、中国大陆のスケール感に励まされているようだった。

この文章を書きながらも、中国での生活を助けて頂いたり、中国の文化や風習を教えて下さったりした多くの方々の顔が思い出され、感謝の気持ちでいっぱいになる。そして、この貴重な出会いの中から「医食同源」を実体験として学ばせて頂いた。



北京市内の茶館にて

中国語や中国茶の先生、市場等市井の人々、中医師から季節や体調に合わせた食材の選び方や性質などを教わった。ひと昔前の日本でも語り継がれていた習わしや知恵を、今も中国では日常の常識として多くの人が意識して生活している。スーパーや市場に行くと、野菜や果物等の商品名の下に効能も表記してある。さすが、東洋医学発祥の地。

家族でよく行っていたスープ専門店では、何十種類とあるスープそれぞれに効用が記されていた。美肌、疲労回復、肝臓、腎臓、胃腸を整える等、その時の体調や養生したい事に合わせてスープを選べる。老鶏と若鶏では効能が違う事も初めて知った。未病の為の養生は、日々の生活に深く根ざしている。

またある時、中国人の友人のご家族と北京郊外に植樹に行った際、ご高齢のお父様は、元気のあるエネルギーな木を選び、その傍で休憩していた。良い木から良い気を貰えるとの事。納得。人も自然の一部。自分自身に耳を澄ませ、自分の体の変化を感じ、自然を大切にしながら共存する。当たり前のこのセオリーが、中国に行ってから私の中で大きく芽生えた。

中国で買った二十四節気の養生本は私の愛読書。「今日は小満だね、何を食べたら良い？」と、夫もカレンダーでチェック。この時季、肝臓を養生するべく酸っぱい物を多く取り入れ、新茶、新じゃがいも、新玉ねぎ等冬の間に養分をたっぷり蓄えた食材から力をもらっている。

日本に帰国してから8年。時の流れは益々スピードが加速しているが、「今、の中国はどうなのだろう。

中国で学んだ多くの事を大切に、いつも心を「平、に保ち、養生を心掛ける事が私にとって中国との繋がりの継続となっている。それが心地良いから……。

やはり私には中国人のDNAも組み込まれているのかもしれない。

#### 高野 尚代（たかの ひさよ）

1970年北海道生まれ。東京都内の短大を卒業後、故郷の帯広市へ戻り、地元のケーブルテレビ局に入社してリポーターなどを務める。結婚を機に専業主婦となり夫の転勤で首都圏に引越し。2011年から3年間、夫の中国赴任に伴って息子と3人で北京にて過ごす。韓国ソウルでの6年間の滞在も経験し、現在は東京都に在住。季節に合わせた中国茶を楽しむのが趣味。